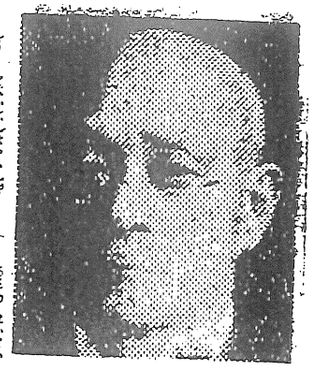
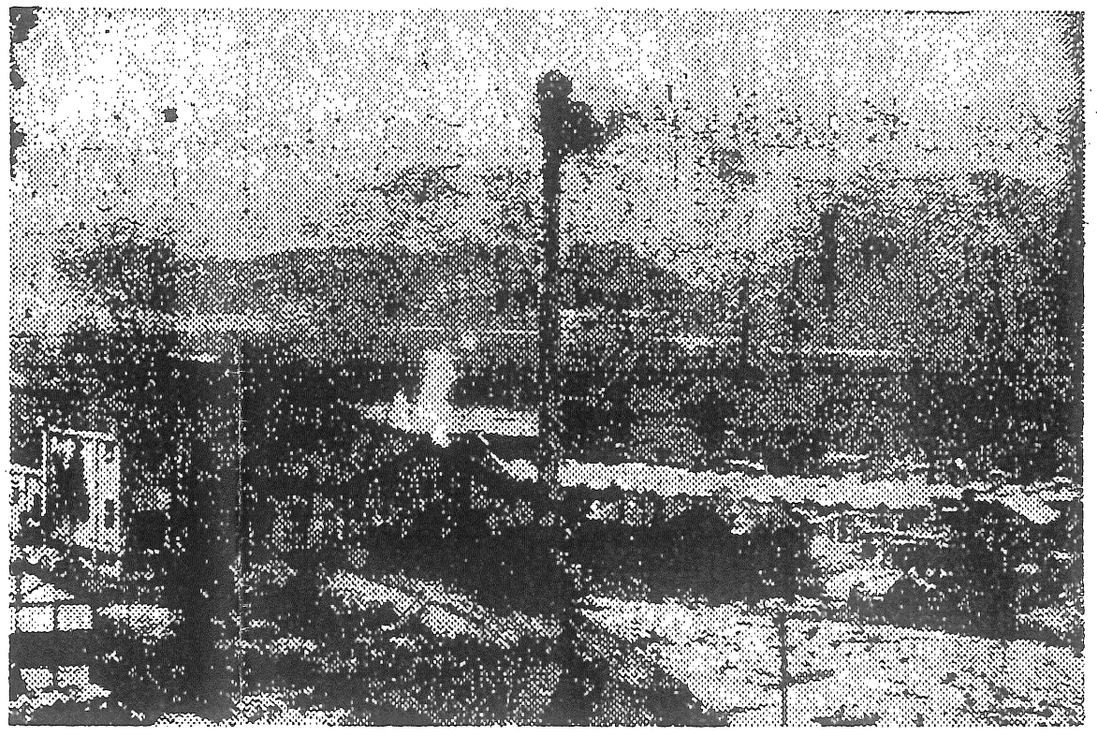
全國に雄飛する北秋木材の偉容

―青森にも分工場―

發展の一路を辿る



北秋木材株式會社は元と淺野製材所と稱しセメント王淺野總一郎氏と秋木の共同經營で創立當時の拂込總資本拾五萬圓、明治四十年五月三十一日扇田町に設立その後火災に遭ふや飯詰大館町進出を企て大正十年合資會社平泉商店と大館製材の二會社を併合、かくて一躍八拾萬圓の大會社となり現在の松木境の二萬四百坪の用地を買收、次で二千坪の大工場を新設、こゝから直ちに大館驛構内に引込線で連絡をとるなどその規模の大なる日本一流の大會社となつた、また大正十三年末、青森縣下增川の官營製材工場を拂下げ之を增川分工場として大正十四年一月から操業北海道進出の足場としてゐる專務取締役綠川賢作氏は果敢にして堅實、よく北木の今日の基礎を築きあげたるのみならず木材界の大御所として重きをなしてゐる、社員二十二名、職工二百二十名これが綠川專務の命令一下よく手足の如く動くところに北秋木材の話と歡統がある、一日の製材能力六百石一ヶ年の製材製品十二萬五千石これに要する原木十九萬二千石、實に驚くべき偉力だ、原料は主として秋田杉だが椈、赤松等もある、主要製品は四分板、六分板、板割、平割、小角類、小割類、價その他一切に及びその販路は全國各地に行き渡らざるところなしといふ有樣である、また增川分工場は使用地面積九千百八十坪、建物坪數八百八十五坪、職工男女九十二名、一日の製材能力二百五十石、一ヶ年の製材製品五萬二千石、その資材原料は椈材のみにて八萬石、本社及び分工場の電燈する新鋭の機械類は凡そ次の如し